

### 三、ダビデとナタン——権力濫用に挑戦する（物語を変える）

サムエル記下第十一章二——七節、二六——二七節、第二十二章一——七節

私たちは激しい国家主義の時代に生きている。私たちが一つの人類家族になるか、それとも自滅するかのまさにその歴史的段階の中で、大国の指導者たちは私たちを互いに敵対させようと決意しているかのように見える。ソ連の指導者は、自分たちの衛星国でないすべての国家ことに合衆国は自国の目的のために全世界を経済的に支配しようとしている「帝国主義＝資本主義的戦争屋」であると言う。私たちの指導者は、左翼の国家ことにソ連は自国の目的のために全世界を政治的に支配しようとしている「神無き無神論者」（奇妙な言語的重複であるが）であると言う。両者の言い回しが意味していることは明瞭である。自分たちは潔白であり、悪いことはどこか他にある。そして悪いことがどこにあるかを本当に知りたければ、その場所を間違いなく指摘でき

るということである。

しかし問題はただ指導者だけのことではない。問題は私たち自身である。私たちも同様の考え方をしており、(同じ言い回しをしようとしまいと)ステイブン・ディケイターが「我らが祖国よ……常に正義の側にあらんことを。正しくても、間違っていて」と言った乾杯の言葉を肯定している。私たちの国の安全を脅かしたり、「ヤンキー、ゴースホーム」と叫んだり、「社会主義」の指導者を選出したり、私たちがその国の国境周辺にミサイル基地を設けることに抵抗するような「他の」国々がなかったら、世界は何と素晴らしいのにと私たちは主張している。彼らはただ、私たちがしていることは何でも彼ら自身のためによいことであると気づいてくれさえすればよいのである。

このような話が、大抵の場合、あけつびろげに公然と行なわれている。自国の長所は賞賛し、どこか他国の欠点はあげつらうことについて、最近では言葉の表現に抑制がきかなくなっている。いや、それ以上に恐ろしい態度が現れてきている。それは、自分の国(あるいは、自分の見解や自分の教会)に対して批判を加えることは卑劣であり、それゆえにタブーとする態度である。批判は特に公の場では批判される側を弱めることになり、それは敵を助けて楽にさせる背信行為となるというものである。「アメリカ——これを愛するか、さもなければ去れ」が実際に意味

していることは、「アメリカを愛するとは批判しないことであり、もし批判があるなら、ここを去ってソ連に行くべきである。なぜならばあなたは自分の本当の忠誠がどこにあるのかをすでに口に出してしまっているから」ということである。

このような考え方に挑戦している聖書物語がある。その物語は、国または指導者に対する忠誠は決して無批判な忠誠であってはならず、批判は時には真理のために正当であるのみならず道徳的に必要であると主張する。私たちはそれをナタン事件と呼んでよいかも知れない。

聖書のテキスト サムエル記下第一章二―一七節、二六―二七節、

第二章一―七節

さて、ある日の夕暮、ダビデは床から起き出て、王の家の屋上を歩いていたが、屋上から、ひとりの女がからだを洗っているのを見た。その女は非常に美しかった。ダビデは人をつかわしてその女のことを探らせたが、ある人は言った、「これはエリアムの娘で、ヘテびとウリヤの妻バテシバではありませんか」。そこでダビデは使者をつかわして、その女を連れてきた。女は彼の所にきて、彼はその女と寝た。(女は身の汚れを清めていたのである。)こうして女はその家に帰った。女は妊娠したので、人をつかわしてダビデに告げて言った、「わ

たしは子をはらみました」。

そこでダビデはヨアブに、「ヘテびとウリヤをわたしの所につかわせ」と言ってやったので、ヨアブはウリヤをダビデの所につかわした。ウリヤがダビデの所にきたので、ダビデは、ヨアブはどうしているか、民はどうしているか、戦いはうまくいっているかとたずねた。そしてダビデはウリヤに言った、「あなたの家に行つて、足を洗いなさい」。ウリヤは王の家を出ていったが、王の贈り物が彼の後に従つた。しかしウリヤは王の家の入口で主君の家来たちと共に寝て、自分の家に帰らなかった。人々がダビデに、「ウリヤは自分の家に帰りませんでした」と告げたので、ダビデはウリヤに言った、「旅から帰ってきたのではないか。どうして家に帰らなかったのか」。ウリヤはダビデに言った、「神の箱も、イスラエルも、ユダも、小屋の中に住み、わたしの主人ヨアブと、わが主君の家来たちが野のおもてに陣を取っているのに、わたしはどうして家に帰つて食い飲みし、妻と寝ることができません。あなたは生きておられます。あなたの魂は生きています。わたしはこの事をいたしません」。ダビデはウリヤに言った、「きょうも、ここにとどまりなさい。わたしはあす、あなたを去らせましょう」。そこでウリヤはその日と次の日エルサレムにとどまった。ダビデは彼を招いて自分の前で食い飲みさせ、彼を酔わせた。夕暮になつて彼は出ていって、その床に、主君

### 3. ダビデとナタン——権力濫用に挑戦する

の家来たちと共に寝た。そして自分の家には下って行かなかった。

朝になってダビデはヨアブにあてた手紙を書き、ウリヤの手に託してそれを送った。彼はその手紙に、「あなたがたはウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼の後から退いて、彼を討死させよ」と書いた。ヨアブは町を囲んでいたので、勇士たちがいると知っていた場所にウリヤを置いた。町の人々が出てきてヨアブと戦ったので、民のうち、ダビデの家来たちにも、倒れるものがあり、ヘテびとウリヤも死んだ。

ウリヤの妻は夫ウリヤが死んだことを聞いて、夫のために悲しんだ。その喪が過ぎた時、ダビデは人をつかわして彼女を自分の家に召し入れた。彼女は彼の妻となって男の子を産んだ。しかしダビデがしたこの事は主を怒らせた。

主はナタンをダビデにつかわされたので、彼はダビデの所にきて言った、「ある町にふたりの人があって、ひとりには富み、ひとりには貧しかった。富んでいる人は非常に多くの羊と牛を持っていたが、貧しい人は自分が買った一頭の小さい雌の小羊のはかは何も持っていなかった。彼がそれを育てたので、その小羊は彼および彼の子供たちと共に成長し、彼の食物を食べ、彼のわんから飲み、彼のふところでは寝て、彼にとっては娘のようであった。時に、ひとりの旅びとが、その富んでいる人のもとにきたが、自分の羊または牛のうちから一頭を

取って、自分の所にきた旅びとのために調理することを惜しみ、その貧しい人の小羊を取って、これを自分の所にきた人のために調理した。ダビデはその人の事をひじょうに怒ってナタンに言った、「主は生きておられる。この事をしたその人は死ぬべきである。かつその人はこの事をしたため、またあわれまなかつたため、その小羊を四倍にして償わなければならない」。

ナタンはダビデに言った、「あなたがその人です」。

この物語は実際には三つの物語から成っている。最初にあるのはダビデとバテシバの不倫関係の物語であって、裕福な境遇にいる人々が読むのはこの話である。それは私たちにとって姦淫が悪いことであり、欺きや殺人に至ることを告げる道徳的密きの使信となっている。第二番目にあるのはナタンとダビデの敵しい関係の物語であって、邪悪な暴君の下で苦しんでいる被抑圧者が読むのはこの話である。それは彼らにとって希望の使信であり、権力を濫用する者たちに対して立ち上がり、「否」を唱えることが可能であることを示している。第三番目にあるのは、雌の小羊の物語であるが、それは明らかに他の二つの物語を結びつける単純な短い話である。

1 ダビデの物語は、個人の不正行為がその人自身にもまた公的にも、どのような結果をもたらすかという極めて道徳的な話である。英語訳では少し控え目な表現がなされているが、何が起きているかはあまり深く考えなくても分かる。

ダビデ王は、軍隊が山地で戦うために出て行った時、宮廷に残っていた。ある日の午後、彼はバテシバという女性が裸になって行水しているのを見て、彼女とセックスをしたくなった。予測される成行きには二段階があった。(一)王はこの女性を自分のものにしたくなる、(二)王は実際にこの女性を自分のものにしてしまう。しかしこの時だけは第三段階があった。(三)王は女性を妊娠させてしまったのである。

何をなすべきか。面倒なことにその女性にはウリヤという夫がいた。さらに面倒なことには、夫は町にはおらず、軍隊と共に出かけて忠実にも王のためにアンモン人と戦っていた。体面を重んじるダビデは一つのたくらみを企てた。兵士たちへの思いやりとして、ウリヤを前線から呼び戻して自宅で休息をとらせ気晴らしをさせることにしよう。勿論ウリヤはバテシバと寝るであろう。そして何日かたって彼女が妊娠したという知らせが届く時には、ウリヤは喜んであまり深く考えることもなく、生まれてくる子供は自分の子供だと考えるであろう。そうすればダビデ王の問題は無くなってしまおうというわけである。

この巧妙なたくらみにも一つだけ欠陥があった。ウリヤは王に言われた通りにしなかったのである。彼は極めて鋭敏な良心を持った男であるだけに、戦友が死とつき合っている時に、パテシバとつき合っている資格が自分にあると思わなかった。そして結局、妻と一夜を共にしなかった。

休暇中の軍人の行動をよく知っていたダビデは、戦友への忠誠がパテシバの魅力にまさるとは少しも考えなかった。そこで彼はウリヤの休暇を一日（と一夜）延長する。休暇の計画はいとも簡単なことのように見えた。ウリヤに一番いいワインを勧めよう。そうすれば何杯か飲んだ後には、良心が麻痺してリビドーが呼び覚まされ、ウリヤは王の食卓から急いで帰宅し、戦場に戻る前に一回でなく二回セックスすることになるであろう。しかしまたしてもウリヤは自分ほど幸せな状態にない戦友を意識して、妻の腕の中ではなく召使の部屋でその夜も寝てしまうことになる。ダビデは必死であった。彼は、ウリヤのように少し計算ができる人なら誰でも、その子供が自分の子でないぐらいの察しがつくことは分かっていた。そこでダビデはせっば詰まって、司令官あてにウリヤを死なせることを指示した封書を持たせて最前線に送り返した。封書の受取人でありウリヤの上官であったヨアブは、ウリヤが討死するように取り計らうことを命じられたのである。命令についてヨアブがどう考えたにせよ、良き軍人である彼は、「命令は命令」であり、国家元首が全軍の最高司令官でもあることをわきまえていた。彼の戦闘計画にはウリヤがアンモン

### 3. ダビデとナタン——権力濫用に挑戦する

人に殺されることが組み込まれた。

伝令が折り返し宮廷に送られた。全軍最高司令官ダビデは、勇敢なウリヤ軍曹の生命を失われた拙い軍事行動について、寛大にもヨアブ少佐を許した。ウリヤ軍曹のためには軍隊葬が行なわれ、勇功章が死後に授与された。王みずからも葬儀に参列した。亡くなった夫に対する服喪期間が終った後、バテシバは宮廷に召し入れられ結婚式が行なわれた。そして幸せな国王夫妻の間に男の子が——勿論予定日より少し早く——生まれた。これがサムエル記下第一章の最後に書かれていることである。

2 ダビデの物語はサムエル記下第二章で始まるナタンの物語がなかったならば、話がすべてが元に戻って、ここで終っていたかも知れない。私たちはダビデと比べるとナタンについてはほとんど知っていない。彼のことをここで取り上げる前に、彼についていくらかの予備的考察をしておこう（サムエル記下七・一——一七参照）。

ナタンは王宮にいる預言者の一人であった。預言者団は王が決定を下さなければならぬ時、思い思いの方法で神の意志を王に伝える役目を持っていた。思慮ある王は預言者たちを重んじた。なぜならば神が誰か他の者にではなく、自分の側についてくれることをずっと望んだからである。

時には預言者との衝突もあった。例えばある時、ダビデは主のために宮を建てることを望んだ。するとナタンは主から告げられたことに応えて、身の危険を顧みず、ダビデが主のために宮を建てるべきでない——繰り返すが、建てるべきでない——ことを伝えた。これはナタンにとって随分勇気のいることであつた。神の意志を報告することがダビデの意志に逆らうことになるからだけではない。彼はもともと宮を建てることを支持しており、ダビデに建設計画を進めるように促していたからでもある。ところが彼はヤハウェからの最新の啓示によって使信を変更せざるをえなくなり、今やそのことを預言者として公的な立場で伝えなければならなくなったからである。

それゆゑに第二章で私たちが出会うナタンとは、舞台上を大股に歩いてパンチのきいた台詞で痛烈な攻撃をし、第二幕目のカーテンが降りた後は再び登場してこないようなただの部外者ではない。そうではなく彼は常に舞台の上におり、王室の一部、それも中枢部の一員であつた。そして中枢部に挑戦する者はしばしば権力の外側に投げ出される運命にあつた。

私たちが取り上げている話の時点では、ナタンは以前に一度王の意向に反したものの、それと何とか切り抜けていた。つまり彼はすでに王に対してノーを唱えた前科が少しあつたということである。そのような不愉快な役目は、まともな人なら人生において二度と直面したいとは思わないだろう。

### 3. ダビデとナタン——権力濫用に挑戦する

しかしナタンにそのような幸運は訪れなかった。彼は誰よりも先に宮廷の噂を耳にすることになる。ダビデとバテシバの間の不倫行為は、(a) 姦淫のみならず (b) 欺きと (c) 殺人をも含んでいた。道徳行為のいかなる基準に照らしてもダビデは三つのすべての点で罪を犯していた。ただ彼はそのことを自覚していなかったので、誰かが指摘しなければならなかった。預言者が介入する役目がここにある。このときナタンは有給ないしは無給の休暇願いを出すことをおそらく望んだことであろう。王に弁明を求めたり、自分にとって地上で至高の權威に挑戦するのは簡単なことではない。そのようなことを行なう者は、王以上に究極的な事柄や人物との関わりを持ち、事実をよくわきまえ、なおかつ明瞭で抑制のきいた話し方ができるようにでなければならぬ。ナタンは明らかにこの三つの点すべてにおいて優れていた……。加えてまた、彼も軍の司令官と同様、「命令下」にあるという事実があった。それは預言者とはいったい何かということである。第一章と第二章をつないでいる聖書のテキストはその点を実に明瞭に示している。「ダビデがしたこの事は主を怒らせた。(そして) 主はナタンをダビデにつかわされた」(サムエル記下一・二七—一二・一)。決着をつける時が来た。こうしてナタンは自分の身の安全を賭けなければならなくなった。

3 雌の小羊の物語は、王に罪を認めさせるためにナタンが仕掛けた罠である。ダビデが自分の口でいかに徹底的な告発の言葉を発し、そしてナタンがいかに対応したかが分かれば、それ以外のことに時間をかける必要はない。

ナタンのやり方は簡単そのものである。彼は王に一つの物語を語る。昔あるところにたくさんの羊を持っている金持がいた。しかし彼は来客があった時、一人の貧しい人が可愛がって育ていた雌の小羊を取って調理し、そして客に食べさせた。話はそれだけである。

ダビデは憤慨する。何という不正義か！ 何というひどい人間関係か！ そんな男は死に値する！ いやしくも他人の物を奪ったことについて、その男は少なくとも四倍を貧しい人に返さなければならぬ！

ナタンはさつと罠を引く。一言だけで十分である。「あなたがその人です」(サムエル記下二・七)。

ナタンは問題の核心をそらさないようにさらに話を続けるが、私たちが語る必要があるのは実際にはここまでである。金持、貧しい人、雌の小羊と、ダビデ、ウリヤ、バテシバとの間にある類似点はかなり明確に浮かび上がっている。

いずれにせよダビデは問題点を悟って悔い改め、「わたしは主に罪をおかしました」(サムエル

### 3. ダビデとナタン——権力濫用に挑戦する

記下一二・一三）と言っている。そして大きな代価が支払われることになる。不義の関係から生まれた子供が死ぬのである。しかしダビデとバテシバの結婚を通してもう一人の子供ソロモンが生まれ、その子は父の王家の後継者として計り知れないほど偉大な存在となってゆく。

こうしてナタンは生き延びる。権力者の不正に対して立ち上がる人々が常に生き延びるとは限らないが、立ち上がるのと計画している人々は自らが生き延びることをあまり計画の中心に置かない方がよいであろう。それゆえにダビデに対するナタンの響き渡るような、明瞭な挑戦の言葉で物語を閉じるのが最善であろう。「あなたがその人です」——罪を犯したのはあなたであり、その代価がどれほど大きくても、あなたは償いをしなければならない。

#### 考察と議論のための課題

もしナタンは愚か者ではなく、彼の行動は模範的であったと考えるならば、私たちには、自分たちの生涯と今の時代の中でどのように同じ行動をとるのかという問題が残る。

- 1 ラインホルド・ニーバーはかつて、私たちの批判的能力を意見の異なる人々に向けるの

と同様に、自分たち自身にも向ける必要があると語った。「私たちは自分たちの真理をもって彼らの虚偽と闘わなければならない。しかし自分たちの真理の中にある虚偽とも闘わなければならない」。このことは、「アメリカ的生活様式」を中米諸国に押し付けようとしている合衆国の企てとどのように関係するだろうか。

2 ナタンの現代版として今日立っている人々とは誰のことであろうか。新しいナタンが必要とされている状況は今日どこにあるであろうか。

3 ドイツのキリスト者は、ローマ帝国のキリスト者が西暦三〇年代に直面した同じ問題に一九三〇年代に直面した。ヒットラーが権力を握り、絶対的忠誠を要求したのである。批判は公私ともに許されなかった。彼は「総統 (der Führer)」であり、批判する余地のない現代の救主であった。ドイツ文化を代表するほとんど——大学、実業界、教会——が降伏した。しかし、教会の中の少数の人たちは降伏しなかった。ペルリンの牧師マルティン・ニーメラーは、『キリストはわが総統なり (Christus ist mein Führer)』という題の説教集を出して、断固として反対した。彼は意識的にナチスの用語を用いて、それが意味しているのではない別の目的に添うように言い

### 3. ダビデとナタン——権力濫用に挑戦する

変えた。キリストが私の「総統」であるからには、ヒットラーは私の「総統」ではないとニームラーは言っているのである。最高の忠誠は二つのものに対してではなく、一つのものに対してでしかありえない。それゆえにキリストに対してイエスを言うことは、ヒットラーに対してノーを言うことになるのである。

マルティン・ニーメラーは収容所で七年間を過ごしたが、彼の視野は告白教会においてさらに広げられた。彼が設立を助けた告白教会は、一九三四年にバルメン宣言を出し、「イエス・キリストは……われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一の御言葉である」と言明した。宣言の起草者たちは、ヒットラーを決して名ざしすることなく、キリストの主張の表明がヒットラーの主張の拒否であることを明らかにした。ナチスはこれについての情報を得た。そして告白教会の多数の会員が収容所の中で命を落とすことにもなった。

合衆国の中には私たち自身の告白教会やバルメン宣言の時代が来ていると感じている人々がいる。これはこじつけや妄想のように見えるであろうか。それとも政府の主張や政策を拒否する方法を探す必要のある兆しが見られるのであろうか。

### 4. ダビデとナタンの事件は物語、というものの威力を示す実例である。私たちは通常、物語と

は人生の厳しい側面を緩和させたもの、すなわち子供に読んで聞かせるもの、あるいは私たちがもっと「重大な」ことにぶつかった時に読むものだと考えている。多くの人々は何かふっ切れない罪意識があつたりする時に、「堅い」読物の代わりに小説に目を転じたりする。

しかしながら物語というものは、雌の小羊に関するナタンの話が示しているように、私たちが自己防衛していることの背後に回って物事を新しく見るように仕向ける。ナタンが謁見を求めた時、ダビデがどれほど緊張し防衛的になったか想像できる。確かにナタンは宮廷の噂を耳にしており、まさにダビデを仕留めようとしていた。それゆえにナタンが「昔あるところに……」と穏やかな言い方で話し始めるのを、ダビデがどんなにかほっとした気持ちで聞いたかをも想像できるのである。裁きではなく余興を行なうことがその日の注文であつた。

しかしすでに見たように、ほっとしたのも束の間、ナタンに許された謁見は穏やかなひとときとはならなかつた。罪なき小羊についての物語は実際には小羊に関する物語ではなく、罪深い王についての物語であつたからである。物語が自分のことだとダビデがやっと気づいた時には、もはや逃げ道がなくなっているような仕方で物語は語られたのであつた。

「あなたがその人です！」というナタンの言葉は、小羊の話と自分の話との間にダビデが設けておきたかつた垣根を一挙に打ち壊してしまった。雌の小羊の物語に引きずり込まれることによつ

### 3. ダビデとナタン——権力濫用に挑戦する

て、ダビデは突如として、自分が雌の小羊の物語を聞き誤っていただけでなく、自分のことをも読み誤っていたことに気づいたのであった。それは不愉快な瞬間的閃きであったに違いない。その時まで彼は、「王には何でも望み通りにする権利があり、そのためにどんな手段を用いても構わない」と考えていた。しかし今やダビデは雌の小羊の物語を通して、「王も他の人々と同じように責任が問われるのであり、自分が犯した過ちに対しては償いをしなければならない」と考えを改め、それが自分にとっての規範とならなければならないことがわかったのであった。

#### 5 誰が口火を切る人になるか。

ギランティ農事合併会社の常務であったデイビッド・マモン（訳者注——国王ダビデの英語名であるデイビッドを名前に、「富」を意味するマモンを苗字に用いている）は、中央アメリカにある小国の輸出入統計を眺めていた。報告書には写真があり、国中に小さな農地が点在していることを示していた。彼は考えた。「われわれの方が土着の連中よりもずっと自然資源をうまく用いることができる。あいつらがやっていることは、自分たちの必要を満たすほかには、ほんのわずかを輸出用に栽培しているだけだ。われわれは国土全体を巨大コーヒー・プランテーションに作り変え、そしてコーヒーを海外輸出して莫大な利益をあげることができる」。

こうして農地は合併会社のものだったから、すべては彼の望み通りに進んだ。一〇年とたたないうちに、国を支配していた独裁者はすべての小さな農地を没収して合併会社に貸与した。立ち退きを拒否した農民の家や畑には謎の放火が行なわれた。全地がコーヒー・プランテーションとなっていた。農民の中には合併会社に再雇用される者もいたが、賃金があまりにも低く、家族の食物すら十分に買うことができなかった。自分たちがかつて耕していた土地で今はコーヒーしか栽培していないため、食物を買わなければならなくなっていた。そしてコーヒーによって子供たちのために十分バランスのとれた食物を買えないことが分かった。彼らが食物を買える唯一の場所は合併会社が所有する店であった。

再雇用されていた何人かの人々が賃金と労働条件の改善を求めて組織化し始めた時、彼らは、賃金が入らないならやめてもらって結構だ、喜んで仕事にありつきたい失業者はたくさんいるんだからと告げられた。組織化に直接関与していた人々は直ちに解雇され、さらに夜間には彼らの家の壁を通して鉄砲玉が見舞われたが、犯人の正体は不明で決して逮捕されることはなかった。独裁者と会社の幹部連中ではかかる行為に関して公的には遺憾の意を表明した。

これらの出来事が一段落した後のある日曜日、デイビッド・マモンは教会に行った。彼は聖歌隊で歌う活動的な教会員で、教区に対しては一番利潤の大きい投資の仕方について助言を与えて

### 3. ダビデとナタン——権力濫用に挑戦する

いた。牧師が当日の旧約聖句として朗読したのは、羊の大群を所有していた金持と、たった一匹の小羊を大切にしていた貧しい人についてのいささか風変りな話であった。金持のところに旅人がやってきた時、金持は貧しい人から雌の小羊を取り、その晩の宴会のために調理するように召使に命じたという話である。

デイビッド・マモンは腹が立った。金持にはすでにあり余るほどの羊がいるのに、貧しい人から唯一の財産を取り上げて殺してしまうとは何というひどい仕打ちであろうか。礼拝後のコーヒー・タイムのとき、マモンは興奮して言った。「金持はその貧しい人に少なくとも自分が盗んだ四倍を償うべきであった」。

しかしダビデを指さして「あなたがその人です」と言ったナタンは、そこにはいなかった。